東日本大震災は私達日本人に第３の奇跡をもたらすか

－　陸前高田を訪れて　－

東日本大震災の惨禍より半年を過ぎようとしていますが、いまだ復興の目途がつきかねている状況です。その間ナデシコ・ジャパンによるワールドカップ優勝を頂点に“がんばろう日本”のキャッチフレーズがいたる所で掲げられ、早々に東日本被災地図が店頭に並べられ、これまでの地震と津波による日本列島の被災や、隠蔽され続けてきた原発事故と放射線被爆による深刻な事態を問う声が巷間に氾濫しています。大震災による直接被災者はもとより命令とはいえ身を挺しての原発事故処理班、全国から集まったボランティア達の活躍にも拘わらず、中央の政治と行政は迅速かつ適格な判断と実行を欠き、現地行政の戸惑いと支援活動の齟齬はこれ迄国民が幾度となく味わされた苦渋と何等変わることはありません。それでも世界の人々が驚きをもって迎える現地被災者の冷静な行動、これは日本人が持つ自然に対する畏敬の念と自然災害への諦観によるものでしょうか。

七夕祭りと高校総体開催を控えた仙台駅前の底抜けとはいかないまでも若者達の明るい表情、被災地に至るまでの何事もなかったかのような深緑に包まれた自然、航空機や新幹線も予定通りに運行され道中何ひとつ不自由を感じさせなかった東北の旅、これ迄体感したことのない一夜の揺れを除いて現地の惨状を目にするまでは大震災による惨禍がまるで嘘のような美しい日本の風景でした。

この国はいったいどうなっているのであろうか。これからどうなっていくのであろうか。開国を迫られた明治維新の変革、自国軍に全面占拠された太平洋戦争による戦禍からの奇跡的な復興と国際社会への復帰を遂げてきた私達日本人にとって今回の東日本大震災は第３の国難と捉えるか、再起へのチャンスと捉えるかの選択をせまられています。広島長崎の惨禍を忘れてしまったかのような原発事業の促進、福島第一原発事故による広範囲に亘る放射能被曝は想定外の事故として許されるべきものでしょうか。

日銀による金融市場への介入にも拘わらず、生産業にとって死活問題ともいえる理不尽な投機的円高、平和に慣れ親しみ日々安穏に過ごしてきた自分自身への問いと、一人の職員のボランティア活動への参加に刺激を受け、遅ればせながら嫌がる家内を説き伏せ、“その話に乗った”と参加を快諾した娘と孫娘の四人で陸前高田への不安な２泊３日の旅に出掛けました。早く紀行感想文をとは思いながらも、現地の被災状況に茫然自失、筆を執るのをためらっていましたが、３０数年前に北欧への旅をご一緒したことのある陸前大船渡市在住の同業医である木川田先生から“頑張っています”との便りに後押しされ、意は尽くせないまま感想文を書くことにしました。

いつものように朝の穿刺を終え１１：２５北九州空港発スターフライヤーで羽田空港に定時到着、快速モノレールに乗って浜松町経由で京浜快速に乗り継ぎ、乗り換えの多さに気をもむ老人二人旅でしたがとてもスムーズに東北新幹線東京駅２０番ホームに辿り着きました。羽田空港から東京駅に至る間のいつもと違った薄暗さと蒸し暑さは大規模な節電によるもので、やればできるものだと

その雰囲気にすぐに慣れてしまいました。ランチミーティングの弁当よりちょっとお高い駅弁“東京物語 1500 円也”を買い込み、プラットホームの屋根越しに見える旧東京駅中央ドームを眺めながら東北新幹線やまびこ２８５号は２０番ホームからすべるように定時発車しました。福島県にさしかかって始めて屋根を覆った青シートが目立つ他、一ノ関到着までマグニチュード９．０を窺わせる被災風景は見られませんでした。

一ノ関のビジネスホテルは節電中で薄暗く、夜半長い周期の強い揺れで（震度４）目を醒ましましたがやがて睡魔に引き込まれてしまいました。東京に住う娘と孫は“いつもこうなのよ”と軽い調子で、縁故者への供花と充分な飲物とオニギリを抱えて“今回は無理をしないで行ける所まで行きましょう”と約束してレンタカー・プリウスを駆って陸前高田の被災地に向かって出発しました。車中からの風景は日本のどこででも見られる深緑の山峡でした。予定より随分早く陸前高田市の山際の迂回路にさしかかっていましたが、被災家屋も避難所も仮設住宅も、日曜日であったためかボランティアの姿も見られませんでした。広田半島にさしかかり急に視界が開けたと思った途端に風景は一変、津波によると思われる被災家屋とそうでない家とが明瞭に分別され、既に被災家屋の大半は片付けられていたとはいえ瓦礫の山、冠水したままの道路、遠くの山間に見え隠れする仮設住宅、時折り行き交う車以外人影が全く見られない殺伐とした現場、次々に広がる被災状況にしばし絶句、“胸が痛む”とつぶやく孫娘、十数年前に法事で訪れた時を偲ばせるものは何も残っていませんでした。

今回の目的地の一つであった広田泊（トマリ）にある被災当時唯一の避難所となっていた慈恩寺はあと１０ｃｍの所で津波による被災を免れていました。三陸の風景に溶け込んだような静かな漁村と漁港は山際の高台にある家々を残して中心部は跡形もなく消失、積み上げられた瓦礫と防潮堤のネジ曲げられた鉄扉を残して昔を偲ばせるものは今は静かな漁港と浜辺と道路だけでした。

落ち込んでいた娘を励ましつつ一部冠水した道路を辿って被災の激しかった陸前高田市街地に恐る恐る車を進めてみました。海岸沿いを走るＪＲ陸前大船渡線は駅舎を含め線路は跡形もなく流失し、風光明媚であった海岸から旧市街地は遠く山際まで廃墟となったコンクリートの建造物と各所に積み上げられた瓦礫の山を残して空漠とした風景で、復興の象徴ともいえる奇跡的に残った一本松は淋しそうに既に枯れかかっていました。あれほど美しかった高田松原、堅牢であった防潮堤は見渡す限り完全に消失、冠水に囲まれた瓦礫と人影の無い老人ホームが痛々しい姿で残されていました。

復旧したての大橋を通って陸前高田に別れを告げ気仙沼市に向かいました。居所を間違えたかのように廃墟の中に打ち捨てられたビルディングのような大型漁船、原型を止めないまでに焼け錆びた車の山、道路沿いには根こそぎ引きちぎられた電柱の鉄筋が幾筋も私共の行くてを阻んでいました。事情が許せば気仙沼市街地へ、陸前高田市の奥にある大船渡市へも、石巻を通って仙台へとの思いは募りましたが、今回は無理をしないとの約束で一ノ関から新幹線に乗って七月祭りで賑わう仙台で一泊、その夜２回の余震も気付かず、あそこにもここにもとの思いを残しつつ東京、羽田経由で予定通り北九州空港に帰着しました。

あれ程期待もし逡巡してきた東北被災地への旅は私共にとって何か不消化物を飲み込んだような思いは拭えませんでしたが、比較的スムーズに目的地に辿り着き、未だ復興の目途は全くといっていい程立っていないとはいえ、被災地は瓦礫の山と半壊の家を残しつつ、その殆どが片付けられ、我慢強く静かに本格的復興を待っている被災地の人々の姿が印象的でした。

今回の東日本大震災は果たして日本復活の第３の奇跡へのターニングポイントになるのでしょうか。陸前高田から復旧支援の感謝とこれからの復興の決意を込めて京都大文字の送り火のために送られた松の木の放射能騒ぎ、チェルノブイリ原発事故に見られる数世代に亘るコントロール不能な現実は、私達に充分とはいかないまでも現地の痛みを分かち合う勇気と覚悟が求められていると感じました。とりわけご両親とそのいずれかを亡くされた子供達への長期的な温かい支援は喫緊の課題でしょう。

アメリカが掲げる新自由主義とグローバリゼーションに捕り込まれたこの１０年間に日本にもたらされた社会格差の拡がり、大震災による日本の東西における生活生産格差の拡がり、被災者とそうでない者との落差の大きさを見るにつけ、これからの日本にとって“がんばろう日本”の合言葉を再認識させる東北の旅でした。

平成２３年８月１７日

医療法人財団はまゆう会

理事長　市丸　喜一郎

暑中お見舞い申し上げます。

このたびは、当地方を襲いました大地震大津波災害に際しまして、早速、ご丁重なお見舞い・ご支援並びにご懇切なる励ましのお言葉を賜り、まことに有り難うございました。

今後は皆さまのご厚情に報いるため、一同心をひとつにして地域の保健・医療・福祉の充実向上に全力を傾けてまいる所存でございます。

まずは略儀ながら書中をもって御礼申し上げます。

—東日本大震災被災地
陸前高田施設・大船渡施設
皆、頑張っています—

平成二十三年八月

〒022-0002
岩手県大船渡市大船渡町字山馬越一八八
医療法人　勝久会
理事長　木川田　典彌

東北訪問　平成23年7月30日（土）～8月1日（月）

①東京駅

②東北新幹線（がんばるぞ!日本）

③被災地

④仮設住宅

⑤被災地

⑥被災地

⑦奇跡の一本松

⑧被災地

⑨気仙沼

⑩気仙沼

⑪被災地パノラマ